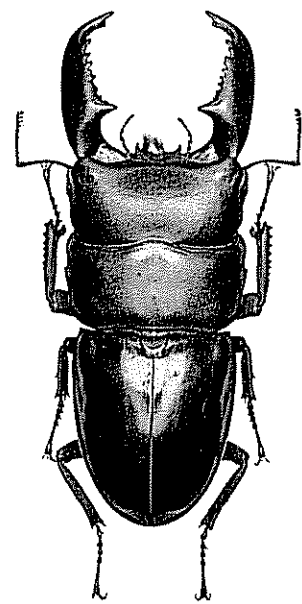
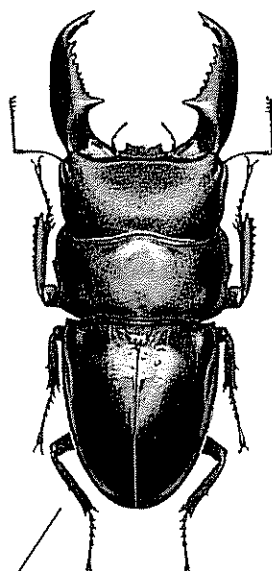


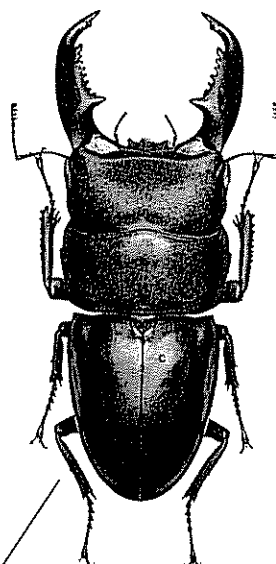
マレー半島・インドネシアの ヒラタクワガタ



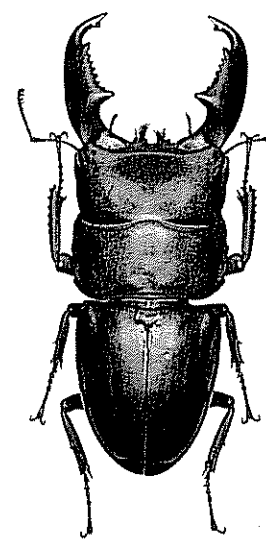
スマトラヒラタ
titanus?
スマトラ
102.5mm



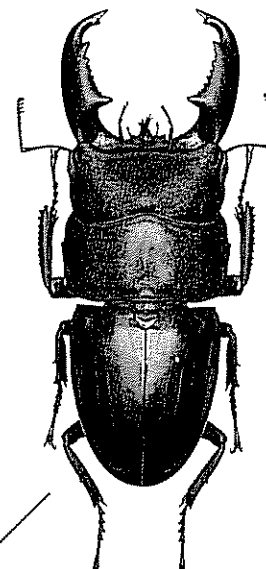
マレーヒラタ
titanus?
マレー半島
98mm



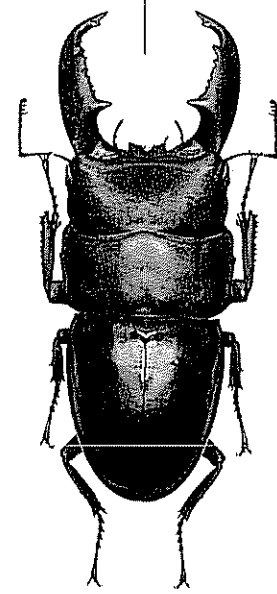
ボルネオヒラタ
titanus?
ボルネオ北部
94mm



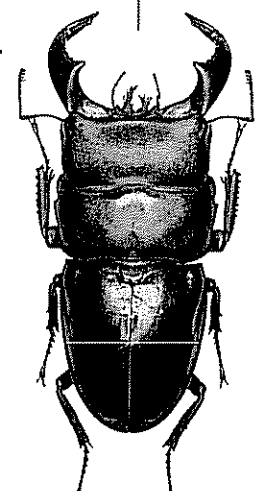
ヒガシスラウェシヒラタ
titanus
スラウェシ北部



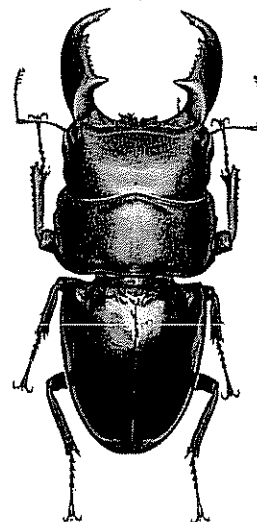
ヒガシスラウェシヒラタ
titanus
ベレン島
99.5mm



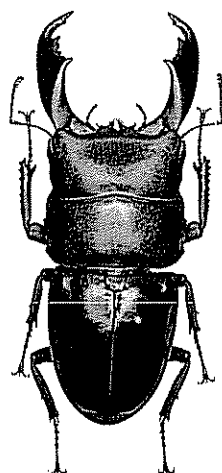
ニースヒラタ
titanus?
ニース島
96.5mm



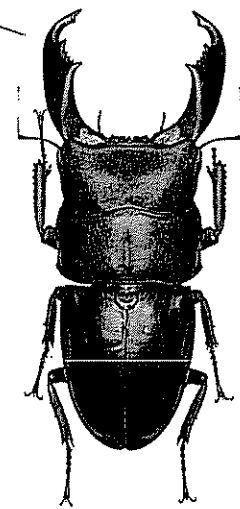
※ダイオウヒラタ ジャワ島にはヒラタ (*Dorcus titanus*) は分布しておらず、代置種と思われるダイオウヒラタ (*Dorcus bucephalus*) がいる



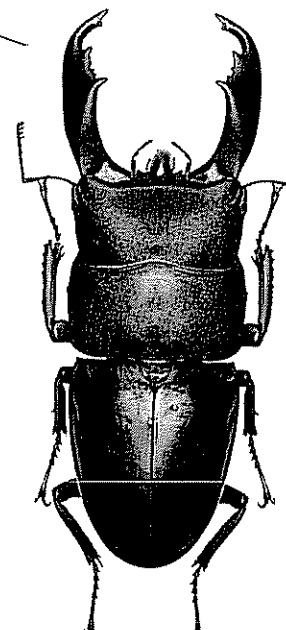
ボルネオヒラタ
titanus?
ボルネオ東部



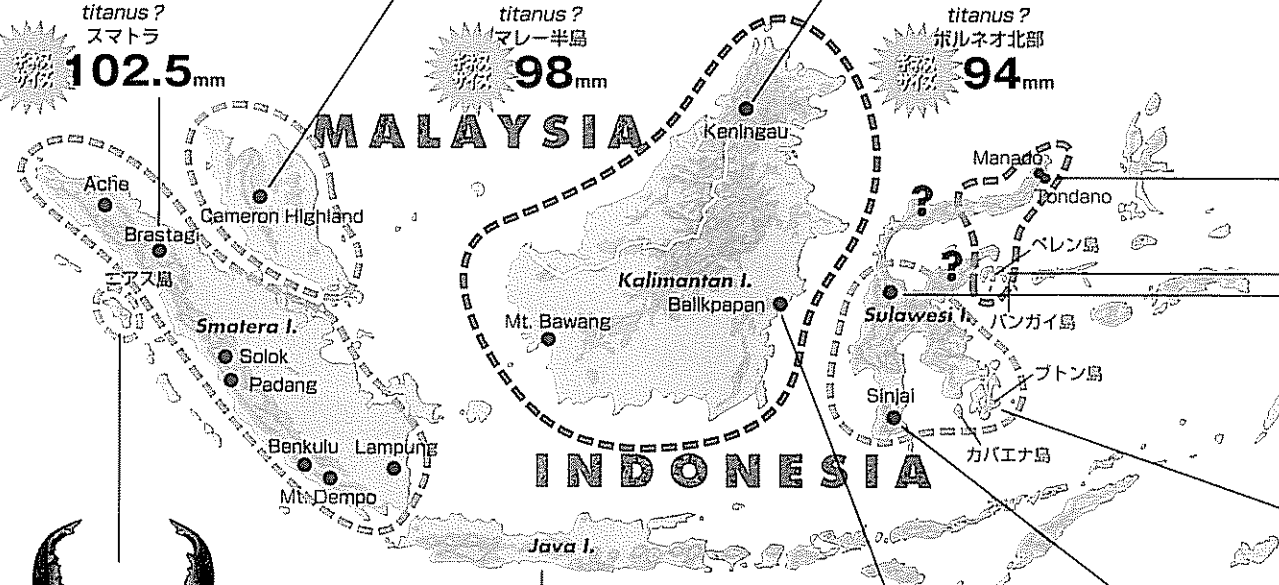
スラウェシヒラタ
titanus?
スラウェシ南部



スラウェシヒラタ
titanus?
プトン島



スラウェシヒラタ
titanus?
スラウェシ中〜南部
102mm



マレー半島、スマトラ、ボルネオ、スラウェシおよびその付属島に分布しているヒラタは、「世界のクワガタムシ大図鑑」(1994)では、すべて原亜種の *titanus* とされている。 *titanus* は、さらにフィリピンにまで広く分布していることになっているが、これらすべてを同一の亜種 *titanus* でくくるのは少々無理がある。これらの地域のは、いくつかの個体群に分けることができ、そのうちの顕著なものは別の亜種として区別した方が妥当だろう。

まず、マレー半島、スマトラ、ボルネオの3産地に分布するものは、大きく1つのグループを形成すると思われる。ヒラタの中でも体の横幅がもっとも広く、頭部も大きく、大あごも強壯で、ヒラタクワガタの粹を集めたような迫力ある一群である。この中では、ボルネオ産はやや細身で体の表面の光沢にもぶく、ざらついた感じである。マレー半島産はボルネオ産の体をすこし太くして、大あごもすこし幅広くして、体の表面の光沢もやや強くなったような型である。スマトラ産は、この傾向がもっとも顕著になったもので、体の横幅はもっとも太く、大あごももっとも幅広く、体の表面の光沢ももっとも強い。迫力ということでは、バラワンヒラタと双璧をなす究極のヒラタといえよう。スマトラ西部のニース島に産するものは、スマトラ産に比べてやや細身で、体の表面の光沢はにぶい。このグループは、マレー半島、スマトラ、ニース島、ボルネオの4産地のものに細分することができる。

スラウェシ(セレベス)産は、島の中央部のパロロバル(Palolo Palu)産の標本や生体が多く出まわっており、やや細身で体の表面の光沢がにぶく、大あごの内歯が中央より上になる独特の個体群としてよく知られている。1835年にBoisduval氏が *titanus* を記載した産地は、スラウェシの北部、ミナハサ半島先端部のメナド(Manado)なので、 *titanus* の基本型はこのメナド産となる。メナド産のヒラタは、パロロバル産のものと見た目がかなり異なり、ずんぐりした体型で、大あごが短く、内歯も中央より下になる。スラウェシ東部にあるベレン島およびバンガイ島のヒラタは、このメナド産によく似ている。スラウェシ南部産では、シンジャイ(Sinjai)およびプトン島・カバエナ島の標本を見たが、大あごの内歯は中央からやや下〜中央より上と変異がある。パロロバル産でも稀に内歯が下になる個体があるので、スラウェシおよびその周辺離島では、地域によって色々な形質が現れるようである。大きく分けるならば、北部のメナド周辺とベレン島・バンガイ島の個体群、中央部から南部およびプトン島・カバエナ島の個体群の2つに分けられそうだ。